

2. 全数把握対象感染症患者報告状況

(1) 全数把握対象感染症の過去5年間の届出状況

	疾患名	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
二類	結核	291	241	161	153	149
三類	コレラ	1				
	細菌性赤痢		1	1		
	腸管出血性大腸菌感染症	14	7	5	11	10
四類	E型肝炎	1				
	A型肝炎				2	1
	オウム病		1			
	重症熱性血小板減少症候群 ¹⁾			2	7	3
	チクングニア熱			1		
	つつが虫病		1	1	1	1
	デング熱	1	1		1	
	日本紅斑熱	10	1	2	13	6
	日本脳炎			1		
	マラリア	1				
	野兔病					1
	類鼻疽			1		
	レジオネラ症	2	3	3	1	5
五類	アメーバ赤痢	3	2	4	7	5
	ウイルス性肝炎(E型、A型を除く)	1		1	1	1
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 ³⁾					4
	急性脳炎				1	2
	クリプトスポリジウム症					1
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	4			1
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症		2	1	1	1
	後天性免疫不全症候群	6	4	4	4	8
	ジアルジア症		1			1
	侵襲性インフルエンザ菌感染症 ²⁾				1	1
	侵襲性肺炎球菌感染症 ²⁾			4	5	7
	水痘(入院例) ³⁾					1
	梅毒	1	1	2	3	2
	播種性クリプトコックス症 ³⁾					1
	破傷風	1	3	4	2	
風しん			30	2	1	
麻しん	1				1	

¹⁾ 平成25年3月4日より全数把握対象疾患感染症へ指定された。

²⁾ 平成25年4月1日より全数把握対象疾患感染症へ指定された。

³⁾ 平成26年9月19日より全数把握対象疾患感染症へ指定された。

(2) 各疾病の届出状況

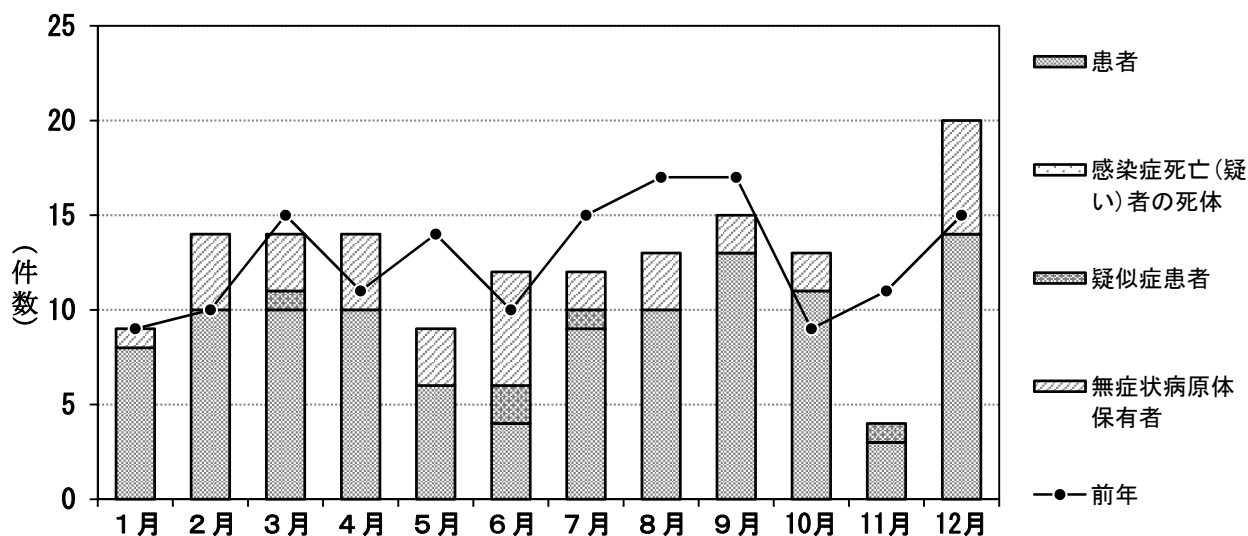
《一類感染症》

一類感染症の届出はなかった。

《二類感染症》

① 結核

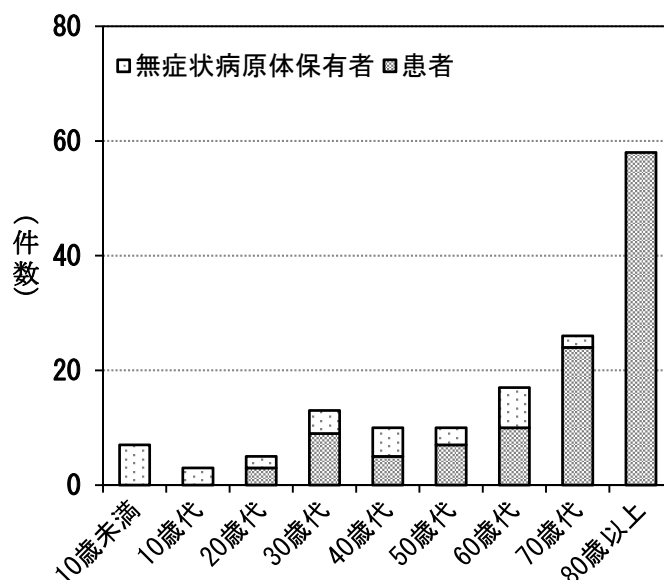
結核の月別届出数



【年齢・性別構成】

	男	女	計
10歳未満	3	4	7
10歳代	2	1	3
20歳代	3	2	5
30歳代	3	10	13
40歳代	2	8	10
50歳代	3	7	10
60歳代	10	7	17
70歳代	14	12	26
80歳以上	28	30	58
計	68	81	149

【年齢・症状別届出数】



平成27年は149件届出られた。過去5年間の年間届出数推移は、平成23年(291件)から2年連続で大きく減少し、平成25年(161件)には平成23年の半数程度に減少したが、平成25年以降はほぼ横ばい状態で推移している。

月別の届出数では、11月(4件)を除き9~20件で推移し、季節的な特徴は見られなかった。

症状別では、「患者」が108件(内訳:肺結核62件、その他の結核41件、肺結核およびその他の結核

5件)と最も多く、「疑似症患者」は5件、「無症状病原体保有者」は36件であった。

届出患者を年齢別にみると、60歳未満では各年齢層とも10件前後の届出数であったが、60歳を越え年齢が高くなるにつれ大きく増加し、60歳以上が101件と全体の約68%を占めた。

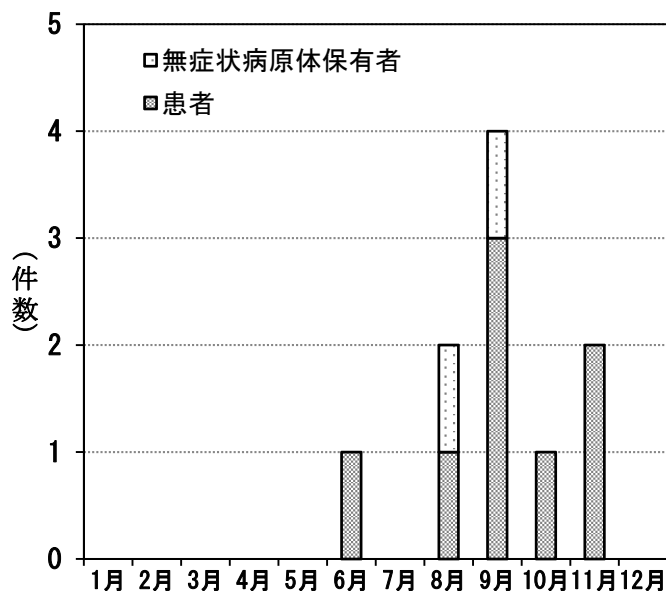
性別では、男性68件、女性81件と女性が男性よりやや多く届出られた。

年齢別に症状を比較した場合、60歳を境として大きく異なった。すなわち60歳以上では「患者」及び「疑似症患者」が89件(約88%)と大部分を占めたのに対し、60歳未満では「無症状病原体保有者」が、「患者」及び「疑似症患者」と同数、24件ずつ報告された。さらに「無症状病原体保有者」の職業別では医療・介護などの施設関係者が11件(約31%)を占めていたことより、施設関係者に対する感染予防啓発、施設における施設内感染対策の徹底が重要と考えられた。

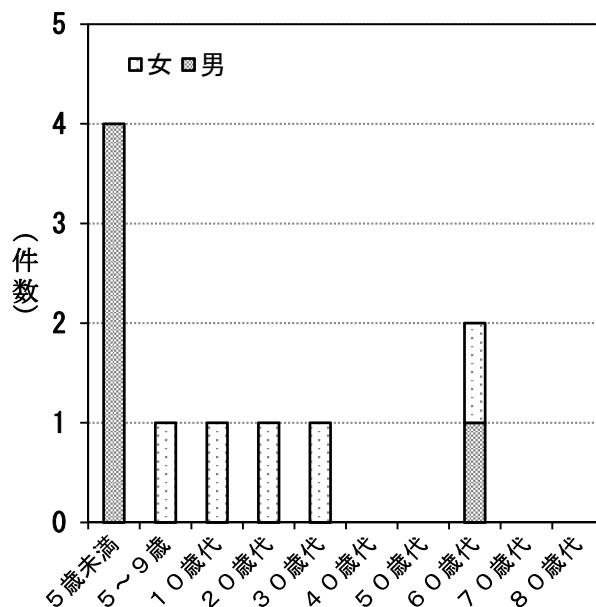
《三類感染症》

② 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の月別届出数



【年齢・症状別】



診断月	性別	年齢	症状	型別	推定感染地域
6月	男	60歳代	腹痛、血便、発熱	0157 (VT1、VT2)	国内
8月	男	10歳未満	腹痛、水様性下痢、発熱	0157 (VT1、VT2)	国内
8月	女	60歳代	無症状病原体保有者	0157 (VT1、VT2)	国内
9月	男	10歳未満	水溶性下痢	0157 (VT1、VT2)	国内
9月	女	30歳代	無症状病原体保有者	0157 (VT1、VT2)	国内
9月	男	10歳未満	水溶性下痢、血便、発熱	0157 (VT1、VT2)	国内
9月	女	10歳未満	発熱	0103 (VT1)	国内
10月	女	10歳代	腹痛、発熱	0103 (VT1)	国内
11月	女	20歳代	腹痛、血便	0157 (VT1、VT2)	国内
11月	男	10歳未満	水溶性下痢、発熱	0111 (VT1)	国内

腸管出血性大腸菌感染症は、平成 23 年以前においては毎年 13～27 件報告されていたが、平成 24 年以降減少し、平成 27 年も前年（11 件）とほぼ変わらず 10 件と届出数は少なかった。これは厚生労働省による生食用食肉の規格基準改正（平成 23 年 10 月より）と生食用牛生レバーの提供禁止（平成 24 年 7 月より）により、生肉・生レバーの喫食が原因となる事例が減少したためと推察される。

月別の届出数は、6～9 月が 7 件と夏期に多く見られ、10～11 月に 3 件の報告があったものの、その他の月で報告はなかった。

診断の類型は「患者」が 8 件、「無症状病原体保有者」2 件と「患者」の割合が多く、年齢別では 10 歳未満から 60 歳代まで幅広い年齢層から報告されたが、20 歳代以下が 7 件（内 10 歳未満 5 件）と若年者から多く報告された。症状は、多くが腹痛、水溶性下痢、血便、発熱、嘔吐など複数の症状を訴え、血清型別では、本疾患の多くを占める 0157 や 0111 の他に 0103 などの血清型も報告された。報告例の感染経路や感染源は、潜伏期間が 2～14 日と比較的長いこともあり、原因の特定には至らなかったが、全て国内にて感染したと推定された。

《四類感染症》

③ A 型肝炎

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
4 月	男	50 歳代	全身倦怠感、発熱、食欲不振、黄疸、肝機能障害	経口感染	国内

A 型肝炎は、4 月に 1 件届出られた。過去 5 年間では前年に 2 件届けられている。50 歳代男性で、本疾患は潜伏期間が 2～7 週間と長いため感染経路の特定には至らなかったが、県内で感染したと推定された。

④ 重症熱性血小板減少症候群

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
6 月	女	70 歳代	発熱、下痢、嘔吐、食欲不振、白血球減少、刺し口	マダニ等からの感染	国内
9 月	男	70 歳代	発熱、神経症状、食欲不振、全身倦怠感、血小板減少、白血球減少、出血傾向	マダニ等からの感染	国内
9 月	男	80 歳代	発熱、筋肉痛、神経症状、食欲不振、全身倦怠感、血小板減少、白血球減少、出血傾向	マダニ等からの感染	国内

重症熱性血小板減少症候群は、平成 25 年 1 月国内で初めての感染例が報告され、平成 25 年 3 月 4 日より四類全数把握対象感染症に指定された。

平成 25 年（2 件）、平成 26 年（7 件）、本年は 3 件届出られた。届出月はマダニの活動時期にあたる 6～9 月に集中し、感染経路は畑作業中などの野外活動時にマダニ等に刺咬され、県内にて感染したと推定された。徳島県では本疾患をはじめ、つつが虫病、日本紅斑熱など、原因微生物を保有するダニや昆虫の刺咬による感染症が毎年のように報告されている。登山、森林作業、農作業など野外作業機会の多い中高年者を中心に、ダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた。

⑤ つつが虫病

診断月	性別	年齢	症状	推定感染経路	推定感染地域
12月	男	80歳代	発熱、発疹、刺し口、発疹 肝障害、血小板減少	ツツガムシ等からの感染	国内

つつが虫病は、1件届出られた。平成24年より毎年1件ずつ届出られている。80歳代の男性で、報告月は患者発生報告が多いとされる冬から春先にあたる12月、県内にて感染したと推定された。

⑥ 日本紅斑熱

診断月	性別	年齢	症状	推定感染経路	推定感染地域
5月	女	70歳代	発熱、刺し口、発疹、肝機能異常	マダニ等からの感染	国内
7月	女	40歳代	発熱、頭痛、刺し口、発疹	マダニ等からの感染	国内
7月	男	70歳代	発熱、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常、急性腎障害	マダニ等からの感染	国内
7月	男	60歳代	発熱、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常	マダニ等からの感染	国内
9月	女	70歳代	発熱、発疹、DIC、肝機能異常 CK上昇	マダニ等からの感染	国内
9月	女	70歳代	発熱、頭痛、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常	マダニ等からの感染	国内

日本紅斑熱は、前年（13件）と比べ約半数の6件届出られた。過去5年間での年間届出数は、1～13件と年毎による差が大きい。届出月別は、ダニの活動時期にあたる春から秋にあたる5～9月に集中し、年齢はすべて40歳以上の中高年層と、重症熱性血小板減少症候群と同様の傾向が見られた。本疾患は、畑や森林における野外作業中での感染が数多く報告されているが、本年届出られた多くの例もレジャーや農作業等の野外作業において、ダニに刺咬されたと推定された。

⑦ 野兔病

診断月	性別	年齢	症状	推定感染経路	推定感染地域
8月	女	30歳代	悪寒、発熱、頭痛、関節痛	昆虫等からの感染	国内

野兔病は、8月に30歳代の女性から1件届出られた。過去5年間、県内での患者発生は報告されていない。推定感染地は県外、国内で患者発生報告の多い東北地方への旅行中、昆虫に刺咬され感染したと推定された。

⑧ レジオネラ症

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
4月	男	70歳代	発熱、呼吸困難、意識障害、肺炎、嘔吐、歩行困難、全身浮腫	水系感染 塵埃感染	国内
6月	男	70歳代	発熱、咳嗽、肺炎	水系感染	国内
6月	男	50歳代	発熱、咳嗽、肺炎	水系感染	国内
7月	男	60歳代	発熱、意識障害、肺炎	水系感染	国内
10月	女	70歳代	肺炎	不明	国内

レジオネラ症は、過去5年間、毎年1～3件の報告数で推移していたが、本年は5件とやや増加した。年間を通して発生し、季節的な特徴は見られなかった。性別では男性4名、女性1名と男性が多く、年齢は50歳以上の中老年層であった。病型は全例「肺炎型」で、感染地域は県内、感染経路は多くが水系感染と推定された。

《五類感染症》

⑨ アメーバ赤痢

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
3月	男	20歳代	発熱、肝膿瘍	性的接触	国内
5月	男	60歳代	腹痛、発熱、肝膿瘍	経口感染	国外
8月	男	60歳代	なし	不明	国内
9月	男	50歳代	下痢、大腸粘膜異常所見	不明	国内
11月	男	60歳代	下痢、肝膿瘍	経口感染	国内

アメーバ赤痢は5件届出られた。過去5年間では年間2～7件届出られている。性別は全員男性と男性が多く、年齢は20～60歳代と幅広い年齢層から報告された。推定感染経路は、性的接触が1例、経口感染が2例、不明2例であり、台湾への旅行中に感染したと推定された1例を除き、国内にて感染したと推定された。

⑩ ウイルス性肝炎（E型、A型を除く）

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
8月	男	20歳代	全身倦怠感、嘔吐、褐色尿、肝機能異常、黄疸	性的接触	国内

ウイルス性肝炎は、8月に1件届出られた。年齢は20歳代、病型は「B型肝炎」であり、国内にて感染し、感染経路は性的接触と推定された。過去5年間では、平成23年に「C型肝炎」が1件、平成25、26年に「B型肝炎」が1件ずつ届出られている。

⑪ カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
7月	女	80歳代	肺炎	不明	国内
8月	女	80歳代	肺炎、腸炎、敗血症	医療器具関連感染	国外
10月	男	80歳代	気管支炎	不明	国内
12月	男	70歳代	尿路感染症	不明	国内

カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症は、平成26年9月19日より五類全数把握対象感染症に指定された。

本年は4件届出られ、年齢は70歳以上の男性2名、女性2名であった。感染経路は医療器具を介しての感染が1例、不明3例であり、全例国内にて感染したと推定された。

⑫ 急性脳炎

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
3月	女	70歳代	痙攣、意識障害	不明	国内
11月	男	5歳未満	発熱、項部硬直、痙攣、意識障害	飛沫感染	国内

急性脳炎は、2件届出られた。70歳代の女性と5歳未満の男性であり、国内にて感染したと推定された。1例から「単純ヘルペスウイルス」が検出されている。

⑬ クリプトスポリジウム症

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
3月	女	60歳代	下痢	経口感染	国内

クリプトスポリジウム症は、3月に1件届出られた。60歳代の女性で、国内にて感染したと推定された。

⑭ クロイツフェルト・ヤコブ病

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
10月	女	70歳代	下痢	経口感染	国内

クロイツフェルト・ヤコブ病は、平成24年以降、3年ぶりに1件届出られた。70歳代の女性で、国内にて感染したと推定された。病型は「狐発性プリオン病」であった。

⑮ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
6月	男	40代	ショック、腎不全、DIC、軟部組織炎	創傷感染	国内

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、6月に1件届出られた。40歳代の男性で、感染経路は創傷感染、国内にて感染したと推定された。手術創よりA群溶血性レンサ球菌が分離されている。

⑩ 後天性免疫不全症候群

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
1月	男	40歳代	無症状病原体保有者	同性間性的接触	国内
3月	男	30歳代	無症状病原体保有者	不明	国内
3月	男	30歳代	全身倦怠感、呼吸困難、ニューモシスティス肺炎、サイトメガロウイルス感染症	同性間性的接触	国内
4月	男	20歳代	無症状病原体保有者	不明	不明
5月	男	20歳代	無症状病原体保有者	異性感性的接触	国内
6月	男	20歳代	無症状病原体保有者	異性感性的接触	国内
11月	男	40歳代	無症状病原体保有者	同性間性的接触	国内
12月	男	20歳代	無症状病原体保有者	異性間性的接触	国内

後天性免疫不全症候群は8件の届出があり、過去5年間で最も多い報告数であった。年齢は20～40歳代、性別はすべて男性、病型は「患者」1件、「無症候性キャリア」7件であった。推定感染経路は、不明2件を除き、同性または異性間の性的接触であり、感染地域は不明1例を除き国内にて感染したと推定された。

現在、保健所等を中心に利用者の利便性に配慮した無料検査・相談体制が実施されている。本年、報告された8件のうち、2件は県内保健所で実施された無料検査にて診断、報告された。今後もハイリスク層や検査を受けていない20～40歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、より積極的な普及啓発を推進し、HIV感染の早期発見による早期治療と感染拡大の抑制に努めることが重要と考えられた。

⑪ ジアルジア症

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
8月	男	60歳代	なし	不明	国内

ジアルジア症は3年ぶりに1件届出られた。年齢は60歳代で、赤痢アメーバとの混合感染例であり、国内にて感染したと推定された。

⑫ 侵襲性インフルエンザ菌感染症

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
8月	男	60歳代	頭痛、発熱	不明	国内

侵襲性インフルエンザ菌感染症は、平成25年4月1日より五類全数把握対象感染症に指定された。本年は、前年（1件）と同じく1件届出られた。60歳代の男性で、国内にて感染したと推定された。

⑱ 侵襲性肺炎球菌感染症

診断月	性別	年齢	症状	推定感染経路	推定感染地域
1月	男	40歳代	発熱、咳	不明	国内
1月	男	70歳代	発熱	不明	国内
5月	男	70歳代	発熱、咳、全身倦怠感、肺炎、菌血症	不明	国内
9月	男	70歳代	発熱、嘔吐、肺炎	不明	国内
11月	男	10歳未満	発熱、菌血症	不明	国内
11月	男	80歳代	頭痛、発熱、咳、菌血症	飛沫・飛沫核感染	国内
12月	男	70歳代	咳、肺炎	不明	国内

侵襲性肺炎球菌感染症は、平成25年4月1日より五類全数把握対象感染症に指定された。

本年は、前年（5件）よりやや多い7件届出られた。全例男性で、年齢は10歳未満～80歳代と幅広い年齢層から報告され、すべて国内にて感染したと推定された。

⑳ 水痘（入院例）

診断月	性別	年齢	症状	推定感染経路	推定感染地域
6月	男	10歳代	発熱、発疹、肝炎、膿痂疹	不明	国内

水痘（入院例）は、平成26年9月19日より五類全数把握対象感染症に指定された。

本年は、6月に1件届出られた。10歳代の男性で、国内にて感染したと推定された。

㉑ 梅毒

診断月	性別	年齢	症状	推定感染経路	推定感染地域
10月	女	90歳代	無症状病原体保有者	異性感性的接触	国内
10月	男	80歳代	無症状病原体保有者	異性感性的接触	国内

梅毒は、過去5年間で毎年1～3件届出があり、本年は2件届出られた。年齢は80～90歳代の男女各1名ずつで、病型は「無症状病原体保有者」、国内にて感染したと推定された。

㉒ 播種性クリプトコックス症

診断月	性別	年齢	症状	感染原因	推定感染地域
12月	男	50歳代	頭痛、発熱、意識障害、痙攣	免疫不全	国内

播種性クリプトコックス症は、平成26年9月19日より五類全数把握対象感染症に指定された。

本年は、12月に1件届出られた。50歳代の男性で、国内にて感染したと推定された。

②③ 風しん

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
5 月	女	30 歳代	発疹	不明	国内

風しんは、全国流行の見られた前々年（30 件）から大きく減少し、昨年は 2 件、本年は 5 月に 1 件届出られた。風しんは、抗体価の低い女性が妊娠中に罹患すれば、子供に難聴など重い障害（先天性風しん症候群：CRS）が起こる可能性があることより、今後も迅速な発生報告、流行情報の提供を行っていきたい。

②④ 麻しん

診断月	性別	年齢	症 状	推定感染経路	推定感染地域
11 月	男	30 歳代	発熱、結膜充血、発疹、腸炎	不明	インドネシア

麻しんは、4 年ぶりに 1 件届出られた。30 歳代の男性で、インドネシアへの旅行中に感染したと推定された。心配された患者周辺への感染拡大は見られなかった。麻しんは感染力が非常に強く、容易に感染が拡大することより、ワクチン接種による感染予防啓発が重要と考えられた。